

以上自分はこの經典に關する大體の解説を了つた積りである。從來知られた景典に於て認められなかつた道德經との關連が、此の經典に於ては著しく認められ、唐室の玄門を重んじた時に當つて、特にその教義を道德經の所説に近からしめて說かうとした跡の歴然たることは、景教碑に記せるゝ所と相關せしむることも出來、景教史上に重要な意義と興味とを有するものといはなければならぬ。自分は此の經の解説をこゝに止め、進んで一々の文句について精細なる研究を施すこととは、これを其の道の學者の努力に俟つこととする。

註① 拙稿「景教經典序聽迷詩所經に就いて」（内藤博士還暦祝賀支那學論叢所收、編者註、本卷所收）第三頁参照。

② 同上第十頁参照。

③ 本論第111頁参照。

④ F. W. W. Müller, Sogdische Texte, I, S. 33¹⁴.

⑤ Ibid. S. 79⁸

⑥ Gauthiot, Essai de grammaire Sogdienne, p. 112, 157, 175.

⑦ Havret, La stèle chrétienne de Si-ngan-fou, III, p. 11.

⑧ かゝる見方はもとより新しいのではなく、例くばハイト（Neumann）はよく知るゝ通り景教碑は偽作せられたものであることを歴史的事實によつて示すとし老子の教と基督教の福音書に説く所とは本來同一であるとし、西方に去つたと傳くるゝ老子が、阿羅本となつて再び中國に歸つたものであることを碑文に書いた。即ち「宗周德寧、青駕西昇、巨唐道光、景風東扇」といふ多少曖昧な文句は、この意味を記したものであると説いて居る。（Z. D. M. G. 1850, S. 41）如きはそれである。この文句を氏の解する如くに認める」とは賛成しかねるが、それにしても此が、老子と景教との間に或る關係を持つた」とある。